

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K03165

研究課題名(和文) 『悦楽の園』にみる12世紀ヨーロッパのダイアグラムの思考術とその波及

研究課題名(英文) Diagrammatic art of thinking and its spread in 12th century Europe seen from the Hortus Deliciarum

研究代表者

千葉 敏之 (Chiba, Toshiyuki)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：20345242

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究計画では、『悦楽の園』所収の挿絵を含む図版346点のうち、ダイアグラムを含む頁をリストアップし、関連する収録テキストとの対応関係を確認しつつ、ダイアグラムの構成や目的に応じた類型に分類し、基礎データとした。そのうえで、ホーエンブルク女子修道院とその文化圏における12世紀後半の蔵書状況を蔵書リストや書簡をもとに分析した。また、『花樹の書』などのダイアグラム入り詞華集だけでなく、キケロ著『スキピオの夢』を註解したマクロビウスの写本などの継続転写型の写本群の転写・蔵書状況を調べた。その結果、パリ大学を中継点とするダイアグラム写本の波及経路のうちアルザスに至るルートをほぼ確定することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究計画の意義は、第一に、歴史家・思想家が注目するテキスト部分や、美術史家・写本研究者が着目する挿絵ではなく、テキストと図像が組み合わされたダイアグラム頁に目を向けた点にある。また、1冊の編纂物/アルザスの一修道院というミクロな世界から出発して、12世紀ルネサンス期のパリをハブとする最先端の知的成果の全欧的な波及というマクロな問題を踏まえつつ、12世紀ルネサンスという広域的な文化・社会運動がアルザスの一修道院共同体という極小世界の生活・宗教実践に受容されていた事実を指摘し、そのルートの一つを明らかにした点にある。

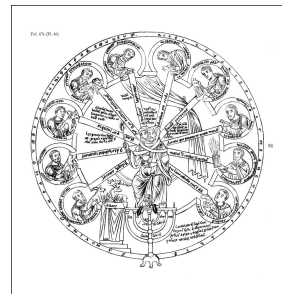
研究成果の概要(英文)：In this research plan, out of 346 plates including illustrations from "Hortus Deliciarum", pages including diagrams are listed, and while confirming the correspondence with related recorded texts, depending on the composition and purpose of the diagram. It was classified into various types and used as basic data. Then, we analyzed the collection of books in the Hohenburg Convent and its cultural sphere in the latter half of the 12th century based on the collection list and letters. In addition, we investigated the transcription and collection status of continuous transfer type manuscripts such as Macrobius's manuscript, which is a commentary on Cicero's "Somnium Scipionis", as well as a collection of illustrations with diagrams such as "Liber Floridus". As a result, it was possible to almost determine the route to Alsace among the ripple routes of the diagram manuscript with the University of Paris as a relay point.

研究分野：西洋史学

キーワード：ヨーロッパ中世 ダイアグラム 思想史 悦楽の園 書物史 文化史

1. 研究開始当初の背景

『悦楽の園』(Hortus Deliciarum)は、12世紀の第4四半期(1175～1200年頃)に、アルザス地方のホーエンブルク女子修道院(現モン・サントディール)院長ランツベルクのヘラート(1130-1195年)が編纂した詞華集(テキスト・図像アンソロジー)である。本書は、旧約聖書の創世記から新約聖書のヨハネ黙示録に至る聖書正典の文書の配列に従いつつ、主題別(天地創造、モーセの役割、聖マリアの無原罪の御宿りなど)に、12世紀ルネサンス期の教会知識人のテキスト



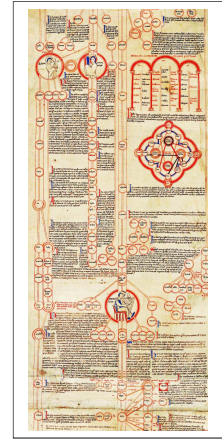
からの抜粋を有機的に挿入し、要所に他に例を見ない独創的な挿絵やダイアグラム(円・三角形・四角形などの基本図形、人物像などの絵、テキストを組み合わせたもの)【上図】を配置する構成になっている。普仏戦争時の爆撃により貴重な唯一の原本は失われてしまったが、それ以前の書写や研究者のメモ類をもとに、ロンドン・ウォーバーク研究所が復元したファクシミリ版が1979年に刊行されている。この復元版の出版に合わせて、原本の来歴や書体等の書冊学的な分析、ページのレイアウトに関する基礎研究の成果も、第1巻として公刊された(Herrad of Hohenbourg, Hortus Deliciarum. Directed by Rosalie Green. 2vols. London et al., 1979)。

2. 研究の目的

これまでの研究により、『悦楽の園』に収録されたテキストの引用元が、聖書やアウグスティヌスなどの教父著作を除くと、ホノリウス・アウグストドゥネンシス著『教会の鑑』や、ルーペルト・フォン・ドイツ著『聖務についての書』、ペトルス・コメストル著『スコラの歴史』など、12世紀ルネサンスの前半期の代表的成果となっていることが明らかとなっている。その一方で、所収のダイアグラムには比較すべき類例がなく、その考案に影響を与えた着想源(アイディア・ソース)の確定には至っていない。テキスト及びダイアグラムの着想源・影響源の特定は、『悦楽の園』という一作品についての研究を越えて、アルザスの女子修道院を中心とした広域的な知のネットワークを浮かび上がらせるとともに、本計画の代表者が「寓意の思考 魚の象徴学からみた中世ヨーロッパ」(2015年)で取り組んだ、中世ヨーロッパに固有のテキスト=画像=儀礼の相互媒介的な思考術(寓意の思考)の根幹をなすダイアグラムの思考術の解明にもつながる。

影響源を特定するうえで重要となるのが、同時代に幻視 visiones 作品を表わした2名の人物である。一人は、同時代にライン河畔のピンゲン女子修道院の院長であったヒルデガルト・フォン・ピンゲン(1098-1079年)であり、彼女が見た幻視を口述筆記した著作(『道を知れ』 Scivias など)は、ダイアグラムの多用、ホーエンブルク女子修道院との近隣性や同時代性、神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世との個人的な文通の事実など、影響源の特定に関する情報だけでなく、ダイアグラムの機能を考えるうえでもきわめて示唆に富む。二人目は、カラブリアの預言者フィオーレのヨアキム(1135-1202年)で、院長ヘラートの同時代人でシトー会士であったヨアキムは、やはり幻視を通じてえた終末に関わるビジョンを、独特のダイアグラムを用いた書物(『十弦の琴の書』 Psalterium decem cordarum など)に著している。ヒルデガルトやヨアキムの研究は浩瀚であるが、本研究では、両者の幻視とダイアグラムの関係、その構想に至る着想源に絞って分析する。

幻視 というコミュニケーション行為は、『悦楽の園』の読まれ方の問題と深く関わっている。院長ヘラートが自ら明記するように、この詞華集は修道女の読書や修道院内での使用を目的として編集されている。修道女は静謐な空間でその時の自分に必要な箇所を開き、テキストを知解しながら、ダイアグラムを媒介にして瞑想（幻視に類する体験）に入る一方、参事会室や教会での典礼時に行なわれる共同での読書では、修道女として身につけるべき徳目を確認し、その日の儀礼や祈りがもつ霊的な意味を共有した。つまり『悦楽の園』は、女子修道院内での知的読書、瞑想、愛徳教育、儀礼による霊的交感を可能にする信仰実践の手引き／ツールとして考案された編纂物であったのではないかと考えられるのである。



ダイアグラムの考案と波及に最も影響力を持ったのは、パリ大学であった。『悦楽の園』の考案・編集にも、パリ大学の人脈や書籍の流通・貸借が大きく影響していたと推察される。パリ大学周辺で着目すべき人物のうち、本研究では、アダムからキリストに到る血統を数メートルに及ぶ縦長のダイアグラムにまとめた『キリストの系図を通した歴史梗概』（*Compendium historiae in genealogia Christi*）【上図】を著したパリ大学神学部教授ポワティエのペトルス（1130-1205年）に着目する。また、パリ大学に学び、その教場にこの「キリストの系図」が掲げられていたことを書き記している、後にカンタベリ大司教となったスティーブン・ラングトン（1168-1228年）についても、ダイアグラム写本のイングランドへの波及者として注目したい。

寓意の思考の根幹をなすダイアグラムの思考術は、膨大な情報を脳内に保管する技術としての記憶術（*ars memorativa*）と連動する思考術でもあった。新約聖書マタイ伝第1章や旧約聖書全体にわたって記されている「キリストの系譜」について、膨大な文字情報として記憶＝暗誦するのは困難を極めるが、ペトルスの「キリストの系図」ダイアグラムを用いれば、樹形図のような構成と人物半身像が描かれたメダイヨン（円形型肖像）そして余白に整序された文字情報との組み合わせによって、このマス・データは、視覚性が高く、記憶に適した情報塊となる。こうした記憶術的観点も、『悦楽の園』の分析やダイアグラムの思考術の波及過程の解明に不可欠な視点となる。

3. 研究の方法

本研究計画では、上述の研究目的を踏まえ、

- (a) 『悦楽の園』所収のテキスト・ダイアグラムの着想源を示す関係性マップの作成
 - (b) ダイアグラム頁を有する写本群（ダイアグラム写本）のリストアップと基礎データの作成
 - (c) パリ大学を中継点（ハブ）とするダイアグラム写本の広域的な波及経路の確定
- の3項目を4年間の期間内における研究課題として設定する。

本研究計画「『悦楽の園』にみる12世紀ヨーロッパのダイアグラムの思考術とその波及」における具体的な研究計画・方法は、上記(a)～(c)の研究課題・達成目標に即して、以下の1)～5)の通りである。

1) 『悦楽の園』所収のダイアグラムの類型化

研究の準備作業として、『悦楽の園』所収の挿絵を含む図版346点（現存は約半数）のうち、ダイアグラムを含む頁をリストアップし、関連する収録テキスト（ラテン語）との対応関係を確認しつつ、ダイアグラムの構成や目的に応じた類型を考案して分類し、以後の調査の基礎データとする。

2) ホーエンブルク女子修道院とその文化圏における 12 世紀後半の蔵書状況の解明

断片的に伝来する「蔵書リスト」(個人や修道院が残した、当時の蔵書一覧)、書簡等のメタ史料(書物の内容ではなく、そのやり取りに関する情報)、伝来するダイアグラム写本の調査をもとに、ホーエンブルク修道院とその近隣の写本処・図書館を備えた修道院(ピンゲンなど)及び司教座、国王宮廷の附属図書館の蔵書状況を復元しつつ、着想源の絞り込みを行なう。

3) 12 世紀ヨーロッパにおけるダイアグラム写本のリストアップと基礎データの収集

「研究の目的」欄で言及した『花樹の書』『道を知れ』『十弦の琴の書』など、新しく書かれたダイアグラム入り詞華集だけでなく、キケロ著『スキピオの夢』を註解したマクロビウスの写本(原本成立は 5 世紀)など、ダイアグラムの挿入や変化を跡付けることのできる継続転写型の写本群を、パリ、アルザスとの交渉の痕跡を辿りつつ、刊行史料や図書館収蔵写本からリストアップすることで、基礎データを構築する。

4) パリ大学を中継点とするダイアグラム写本の波及経路の確定

ダイアグラム写本のうち、サンプルとしてポワティエのペトルス著の『キリストの系図を通じた歴史梗概』の写本を取り上げ、広くヨーロッパ全域にわたってその波及の概要を明らかにする。また、とくにパリからカンタベリへの波及ルートについて、上記のステープン・ラングトンをはじめ、12 世紀後半における人物の往来を推察しながら、写本の移動やそのための交渉の実態を調査する。

5) 12 世紀ルネサンスのアルザス方面への波及経路の確定とダイアグラム写本の使用法の解明

パリからアルザス方面への知的成果(アラビア語からの翻訳書、新規の著作など)の普及について、その作品名・経路を跡付ける作業を行なう。さらには、他のダイアグラム写本と比較しつつ、『悦楽の園』執筆当時の修道院共同体のうち、とくに修道女の生活・信仰実践のあり方と『悦楽の園』の構成との関係について考察する。その際、近隣のピンゲン修道院などの女子修道院との比較を行なう。

4. 研究成果

初年度にあたる平成 29 年度には、まず基礎作業に必要な研究文献・刊行史料を発注した。そのうえで、4 月から 9 月までの期間は、『悦楽の園』所収のダイアグラムの類型化(作業 1)に取り組み、今後の研究の基盤づくりを行なった。これらの作業を踏まえ、平成 29 年 8 月 24 日~平成 29 年 9 月 11 日(19 日間)にわたり、海外出張を行なった。本科研の課題についての研究計画にある実地踏査対象地域のうち、今回は、女子修道院長ヘラートによって『悦楽の園』が編纂されたモン・サント・ディール修道院、および同修道院とネットワークを形成していた教会・修道院群(サン・ミール、ソーリウ、ノワン・ヴィックほか)の現地調査を行なうとともに、各地で史料・研究文献の調査・収集、博物館(各地の教会施設付属博物館のほか、マンハイム・ライセ・エンゲルホルン博物館、ボン・ライン地方博物館)での現物資料調査を行なった。

平成 30(2018)年度は、まず最初に前年度までに収集できなかった研究文献・刊行史料の発注を行なった(「ダイアグラム関係図書」)。4 月から 9 月までの前半期は、前年度の作業を補完する期間とし、10 月から 3 月までの期間は、作業 5) 12 世紀ルネサンスのアルザス方面への波及経路の確定とダイアグラム写本の使用法の解明に取り組みつつ、前年度までの成果との突き

あわせ作業を進めた。夏期には、12世紀ルネサンスの最初の拠点であるベルギーのリージュを中心とする学問のネットワークの解明、ならびにパリ イングランド間の『キリストの系図』写本の伝播経路を確定するために、ベルギー、イギリス、フランスに出張し、経路上の拠点修道院・司教座の実踏調査を行なった。その成果の一端を論文として執筆した。

本研究計画の3年目にあたる2019年度の前半期は、前年度までの研究成果をまとめつつ、学会報告を行なった。また、トレード翻訳運動との関係を明らかにする観点から新たに調査対象に加えたスペインでの調査の準備を行ない、9月にはスペインに渡航し、クエンカ、マドリード、ムルシア、カルタヘナにおいて、実地での調査を行なった。2019年10月～2020年3月まで、本務校より特別研修期間を与えられ、研究に専念する環境を与えられたが、家族が大病をして手術と長期の入院を余儀なくされたため、この期間に予定していた海外での調査はすべてキャンセルせざるを得ず、主に国内にてこれまでの調査結果について考察し、その成果をまとめることに費やした。また、同時に2020年1月末以降は、新型コロナウイルス蔓延のため、海外に渡航することができず、3月には図書館を利用することも困難となった。

4年目、最終年度の令和2年度は、新型コロナ禍による海外渡航制限のため、当初の計画のような調査は不可能であった。そこで方針を転換し、前年度までに収集できなかった研究文献・刊行史料の発注を行なった(「ダイアグラム関係図書」)。さらに、これまでの海外調査の成果をまとめつつ、主たる対象であるアルザス地方(ホーエンブルク修道院)に加え、計画実施の過程で新たに浮上した拠点施設についての分析を進めた。また、特に女子修道院における写本制作に関する研究を進め、それらの修道院に土地や資金を提供した貴族女性について、研究文献および史料にあたっての分析を進めた。新型コロナ禍により大きく構想を修正したため、当初計画していた総括論文をまとめるに至らなかったが、今後成果を総括する論文の執筆を速やかに進め、次年度に学会で報告することを視野に入れて準備を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 千葉敏之	4. 巻 4
2. 論文標題 巨大信仰圏の交点としての十字軍	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史の転換期 4 1187年 巨大信仰圏の出現	6. 最初と最後の頁 188-255
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千葉敏之	4. 巻 4
2. 論文標題 総説 巨大信仰圏の出現	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史の転換期 4 1187年 巨大信仰圏の出現	6. 最初と最後の頁 2-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toshiyuki Chiba	4. 巻 9
2. 論文標題 Replicated Jerusalem Architectural Copies of Holy Sepulchre in Medieval Europe	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西洋中世史研究	6. 最初と最後の頁 41-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21591/jwmh.2019.44.2.041	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Toshiyuki Chiba
2. 発表標題 Replicated Jerusalem-Architectural Copies of Holy Sepulchre in Medieval Europe
3. 学会等名 The 10 th Japanese-Korean Symposium on Medieval History of Europe（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 千葉敏之
2. 発表標題 地霊論の歴史学的射程 歴史学における 土地 への情念の定位
3. 学会等名 印刷博物館（第1回樺塾）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 千葉敏之
2. 発表標題 合評会：伊東剛史、後藤はる美編『痛みと感情のイギリス史』（東京外国語大学出版会、2017年）へのコメント
3. 学会等名 近世イギリス史学会（2018年度研究会）（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 千葉敏之、大塚修、稲葉穰、松浦史明、飯山知保	4. 発行年 2019年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 277
3. 書名 歴史の転換期4 1187年巨大信仰圏の出現	

1. 著者名 千葉敏之	4. 発行年 2019年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 forthcoming
3. 書名 歴史の転換期4 1187年 巨大信仰圏の出現（総論および第4章・5章を担当）	

1. 著者名 千葉敏之	4. 発行年 2019年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 forthcoming
3. 書名 歴史の転換期5 1348年 気候変動と生存危機 (総論を担当)	

1. 著者名 高橋 慎一郎、千葉 敏之	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 256
3. 書名 移動者の中世	

1. 著者名 木村 靖二、岸本 美緒、小松 久男	4. 発行年 2017年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 576
3. 書名 詳説世界史研究	

1. 著者名 小田中直樹、帆刈浩之	4. 発行年 2017年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 352
3. 書名 世界史 / いま、ここから	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------